

# 思益梵天所問經について

—方等部教説の一斑—

河 村 孝 照

一

日蓮教学にあつては、日蓮上人が天台の所説を越えられたところから、特に超出したところの仏教觀にたつて世間、出世間を眺めてみるとところに特色がある訳であるが、しかしその超出したところの価値を見出すためには、天台所説の、ないしは仏教通途の經典認識の過程を経なければ、より鮮明にこれを見出すことはむづかしい。ここに宗學と仏教學の接点があると思う。

天台五時八教において、われわれの研究課題は、つねに純円の法華經の研究にその勢力のほとんどが注がれる。これを思想の發展經過からみるときは、その関心事は方等部の諸經にあるといえる。天台のいう方等部の諸經とは、思益梵天所問經、首楞嚴三昧經、維摩經等々である。

維摩經が仏教思想の上から、きわめて高い関心がよせられ、古来より幾多の高名な研究書が作られているのは周知のことからであるが、思益梵天所問經や首楞嚴三昧經となると、その関心度は稀薄であり、従つてまたその研究書も

きわめて乏しい。思益梵天所問經のごときは、いまだに国訳すらなされていない。いわば研究外の經典となっている訳である。

著者は最近、思益梵天所問經の全国訳と訳注とを完了したので、いささかその全貌を多少なりとも学会におくり、天台がこれを方等部の經典に撰めた理由の一端を明かして、仏教思想の轉換をはかった大乘信奉者の人人のすがたを偲びたいと思う。

## 二

思益梵天所問經は、漢訳三本と西藏訳があるが、羅什訳がわれわれになじみ易い。しかし具体的に内容を示している点では竺法護の訳がもっとも勝れ、菩提流支の訳本がこれに次ぐ。菩提流支はあきらかに羅什の訳本を参考としているが、より詳説されているところが多いことに目がつく。これは原本が羅什と異なると理解すべきであると考えられるがその論証は他所に譲る。以下羅什訳によって一經の要旨をあかそう。

### 三、各品の要旨

まず始めに一經の分節を示すと、

#### 序品第一

#### 四法品第二

#### 分別品第三

解諸法品第四 以上第一卷

解諸法品第四の余

難問品第五

問談品第六 以上第二卷

談論品第七

論寂品第八

伽行品第九

志大乘品第十

行道品第十一 以上第三卷

稱嘆品第十二

詠徳品第十三

等行品第十四

授不退転天子記品第十五

建立法品第十六

諸天嘆品第十七

囑累品第十八 以上第四卷

右の通りである。この分節は竺法護訳とは多少異なり、また同じ羅什訳でも流布された伝本によって異なる。なお菩

提流支の訳本にはまったく分節がない。

## 一、序品

説法の場所を王舎城迦蘭陀竹林としており、大比丘六万四千人・菩薩七万二千人という。会座に列なる名をあげるのに、文殊、宝手、宝積、宝印、宝徳、虚空蔵、発心転法輪、網明、障諸煩惱、能捨一切法、徳蔵、花嚴、師子、月光、尊意、善莊嚴（以上法王子、以下菩薩）・跋陀婆羅、宝積、星徳、帝天、水天、善力、大意、殊勝意、増意、善発意、不虛見、不休息、不少数、導師、日蔵、持地、（以上菩薩）、四天王、釈提桓因、忉利天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵王、梵天、天、龍、鬼神、夜叉、犍闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅迦、人、非人等をあげている。二、三の名を除き、なじみのうすい菩薩たちが多い。

この会中に網明菩薩がおり、如来に問いを請うて許される。如来のいわれるには、如来に光明があるという。その光明に三三の名称（功德）を経はあげている。網明菩薩は如来に放光をお願いした。その光りを見て、諸の菩薩たちは娑婆世界に來集した。

その時、東の方、七十二恒河沙の仏土をすぎたところに、「清潔」と名づける国があった。その国の仏を日月光如来といた。その仏土に菩薩の梵天がいた。その名を思益といたたのである。日月光如来が思益梵天にいうには、十法をもって娑婆世界に至って奉行せよというのである。この時、娑婆忍土において護るべき十の教法が説かれた。日月光如来の国の菩薩の一万二千人は思益梵天とともに娑婆世界に趣むぎ、十法を護るといのである。仏は網明菩薩に、この思益梵天に十一の最第一のあることを告げる。それは、正問、分別諸法、諸説隨宜、慈心、悲心、善心、捨心、軟語、不瞋礙、先意問訊、決疑の十一において菩薩中最第一であるという。思益梵天は偈をもって仏を讚歎して

序品を終るのである。

一、四法品第二

時に思益梵天は偈を説き終って仏に二十問を發するのである。

第一問、菩薩に疲倦なしという、何故か。

第二問、菩薩の所説は決定す、何故か。

第三問、菩薩は善根を増長す、何故か。

第四問、菩薩は恐れる所なし、何故か。

第五問、菩薩は自法を成就す、何故か。

第六問、菩薩は善く知り、一地より一地に至る、何故か。

第七問、菩薩は善方便を知る、何故か。

第八問、菩薩はよく衆生を化す、何故か。

第九問、菩薩は世世菩提心を失なわず、何故か。

第一〇問、菩薩に雜行なし、何故か。

第一一問、菩薩はよく法宝を求む、何故か。

第一二問、菩薩はよく毀禁の罪を出す、何故か。

第一三問、菩薩はよく煩惱を断ずる、何故か。

第一四問、菩薩はよく大乘に入る、何故か。

第一五問、菩薩はよく法施を開く、何故か。

第一六問、菩薩は善根を失せず、何故か。

第一七問、菩薩は他教によらず、よく六波羅蜜を行ずる、何故か。

第一八問、菩薩は禪定を転捨して欲界に生ずる、何故か。

第一九問、菩薩は仏法において不退転を得る、何故か。

第二〇問、菩薩は仏種を断ぜず、何故か。

仏は右の二十問の一一に、四法をもって答えるのである。従って仏の所説は都合、八十法となるのである。

この二十問の四法を聞いた二万二千の諸天、および人は、皆な阿耨多羅三藐三菩提心をおこし、そのうち五千人は無生法忍を得、十方より来集した菩薩たちは天華をふらして仏に供養し、その華はあまねく三千大千世界に雨り、膝までつもったというのである。

### 一、分別品第三、

思益梵天が仏に二十の問いをなし、仏は八十法の答えをしてそれを聞いた諸天、人は大いなる利益を得た訳である。すると会中の網明菩薩は思益梵天にいう、仏がいわれるには、思益梵天は正問第一であるというが、それは何故か、というのである。思益梵天のいうには、彼我をもって問えば邪であり、以下同様に、法分別、生、滅、住、垢、浄、生死、涅槃、見、断、証、修、得、果、善、不善、世間法、出世間法、有漏法、無漏法、有為法、無為法、仏、法、僧、衆生、仏国、諸乗分別、一、異などをもって問うは邪であるといい、これらの分別をもってせずして問うを正問であるというのである。それ故、諸法の正性は、自性を離れ、欲際を離れてあるものであり、この諸法の正性を

知れば、この人は法であることなくして法を得るものであり、諸法は平等であつて実には生死もなければ涅槃もない。それにもかかわらず衆生は妄想分別して、生死の法と涅槃の法の二相があるといっているのである。諸法の正性は、生死を出ることもなく、涅槃に入ることもないと説く。

この法が説かれたとき、二千人の比丘は漏尽して心解脱を得たが、会中の五百人の比丘は坐を起つた。そしていう、われらは梵行を修して涅槃を求めた、しかし実には滅度なく、涅槃なしというならば、いかなる修行があり、いかなる智慧があるのか。

網明菩薩は仏にいった。涅槃の決定相を見る者は、さきには仏の正法において出家しながらも、今は外道の邪見におちる者である、これ増上慢である、正しく仏道を行ずる者には得果は無いのであると。

網明菩薩は思益梵天にむかつて、この坐より起つた五百人の比丘のために、方便を設けて引導し、邪見を離れしめよ、といった。梵天は五百人の比丘に、汝らは涅槃を求めて、涅槃の行を行じたが涅槃を得ることはできないのである、それは涅槃とは名字があるだけで不可得であると論じた。これを聞いた五百人の比丘は漏尽きて心解脱を得たのである。この比丘に対して長老舍利弗は、汝らは今は、福田となりよく供養をなす者であると讃めた。思益梵天は仏にむかつて、三十一問をもつて涅槃不可得の功德の様相を問うている。仏はそれに答えて、世法を索かず、無所取、菩提性を壊せず、慈心、仏種不断、無生の際に通達する、毀禁せず、六根を覆う、七財成就、出世間の智慧を得る、所願なし、結使を断ず、貪著なし、五陰を知見する、六入を捨す、平等を知る、一切智心を教う、菩提を捨てず、心相の念念に滅するを見る、不可得を求む、身心の麤相を除く、戲論なし、衆生想を生ぜず、法想を生ぜず、我想を生ぜず、彼我想を生ぜず、無濁の法を信解す、一切の語言に著せず、内法を知見し、外法を捨す、身は意業を淨くする

等がそれである。説き終った世尊は偈を説いて、一切無分別をもって菩薩の行となすとしてしめくくっている。

この偈が説かれ後、思益梵天は仏に、菩薩の世間法に対する処し方について問うた。仏はまた偈をもってこれを説いて分別品を終る。

#### 一、解諸法品第四

仏はまた思益梵天に告げられた。それは世間の苦集滅道と、四聖諦と、仏に護念せられる所と、また虚妄について明らかにする。そして、若しは仏有るも、若しは仏無きも、法性は常住であり、生死を離れて涅槃を得るにあらずという、これが聖浄であると説く。

また仏は、未来世に比丘あり、かれは身を修めず、戒を護らず、慧を修せずして、四諦を説くに、生死の相はこれ苦諦、衆縁和合これ集諦、法の滅するこれ滅諦、二法をもって相を求むるこれ道諦と説く者がいるが、これは外道の徒であり、わが弟子にあらずと強調する。そして仏は、諸法は無所得であり、諸法は自性を離れており、それ故、わが菩提には貪愛の相はないのであると説く。宋元明三本と宮内省本は、以上をもって四諦品を終るとなしている。

さらに仏は、思益梵天にむかって、法の無所得の利益について説くのである。仏は、わが所得の法は見聞覚知することはできない、一切の法相を出て言説なく文字なく、あたかも虚空のごときであるからであるという。梵天は仏の意を汲んで、大慈大悲をもって文字言説をもって人に教えて得せしめるのであるといい、よく如来の法の真実の義を信解する者の得る功德を、百五句をもってあげ、この人は諸仏の阿耨多羅三藐三菩提においてよく信受し、その法を説く經典を誦誦し、よく通じ、人のために広説し、如説に修行し、また他をして修行せしめるのであると説き、この人の得る功德は無量であるといっている。



卷第二

(続) 仏が梵天にいわれるには、如来は五力をもって法を説くと。五力とは、一に言説、二に随宜、三に方便、四に法門、五に大悲であるという。

一に言説とは、如来は過去、未来、現在、垢、浄、世間、出世間、有罪、無罪、有漏、無漏、有為、無為、我、人、衆生、寿命、得証、生死、涅槃を説くが、実はこの言説は説くところなしとする。諸法の相は不可説であるからである。

二、随宜とは、如来が垢法に浄を説き、浄法に垢を説くがごときをいう。諸の法性において不可得であるからである。仏は随宜をもって自らを、常辺者、断辺者、無作者、邪見者、不信者、不知報恩者、食吐者、不受者などと説くが、これは衆生をして増上慢を捨てしめようとするためである。菩薩はよく如来の随宜の所説を知るのであるという。

三、方便とは、仏が六波羅蜜、十善道、四無量心を説くのは、衆生のために方便をもって讚歎するのであって、実は須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支仏、阿耨多羅三藐三菩提、ないし涅槃もまた得るところはないのであるという。

四、法門とは、如来は一切の文字において解脱門を説示する。如来所説の法はみな解脱に入り、涅槃に住せしめるのであるから、菩薩はこの法門において修学すべきであるという。

五、大悲とは、如来は三十二種の大悲を説いて衆生を救護する。もし菩薩にして常にこの大悲心を修行すれば不退地に至り、大福田となり、一切衆生を利益する。この大悲の法門を説くとき、三万二千人はみな阿耨多羅三藐三菩提を



ろではない。この二の法性は平等の相を出るものではない。舍利弗とて賢聖法を得るものでなく、凡夫法なるものも見ることはできない、という。舍利弗のいう、仏は、聖者も凡夫ともに法性の如にあり、凡夫如とは漏尽解脱如、漏尽解脱如は無余涅槃如であるといわれたと。普華菩薩は舍利弗のこのことばをうけて、この如を、不異如、不壞如というのであると答えて、舍利弗と普華菩薩の問答をしめくくっている。

つぎに舍利弗は網明菩薩と問答をする。網明菩薩は舍利弗の智慧について問うに、舍利弗の智慧は声聞の智慧にして菩薩の智慧ではないという。網明は舍利弗に智慧は戲論であるが、智慧は平等相ではないのか、智慧最第一というように智慧に量があるのか、と質問する。舍利弗は、智慧は戲論の相にあらず、智慧は平等相であるという。網明は、それでは智慧第一とは意味をなさぬではないかとせまる。舍利弗はついに黙然として答えずというのである。

つぎには長老大迦葉が登場する。かれは次章の問談品の前半までつづく。大迦葉は仏に網明菩薩の因縁を問う。仏は網明に、網明の光明の因縁を現成せしめんとした。網明は右手の爪指の間より大光明を放った。その光明にあう者は、みな同一の金色となり、三十二相八十随好もて仏と異なることはなかった。この光明力によって、下方の世界より四菩薩が地より踊出した。仏は網明に光明を摂めしたところ、仏前の一会の衆はまたものすがたにもどった。その時、大迦葉は仏に問うた。この四菩薩はいずれの所より来るや、その国は何というか、仏は何と名づけるや、その仏国土はここからいくばく離れたところか、と。四菩薩のいうには、下方の世界より来り、その国を現諸宝莊嚴といひ、その国の仏を一宝蓋と名づけ、そこはここを去ること七十二恒河沙のところであると。大迦葉は網明に、網明菩薩が光明を現ずれば、この大会の衆はみな金色となるのは何の因縁の故であるかと問う。仏はこの因縁を迦葉にむかって説かれるには、網明菩薩が成仏するとき、その会の大衆はみな同じ金色にして、ただ清浄の菩薩の会となるの

である。かの国土に生れた菩薩はみな仏の如くなるという。このことを聞いた会中の四万二千人の人はみな阿耨多羅三藐三菩提心をおこして、かの網明菩薩の国に生れんことを願った。

### 一、問談品第六

時に大迦葉は仏に、網明菩薩はいつ阿耨多羅三藐三菩提を得るかと問うと、網明菩薩のいうには、一切の諸法には決定の相はない、かれも、自相を離れ、異なく別なく、志す所の願もない。衆生を利することもなければ、衆生をして菩提に住せしめるところもない。それではいづくに趣むこうとしているかといえ、それは如如趣である。如如には趣なく転なく、衆生の教化もない。もし発願すれば衆生を教化することはできないし、法において転ずることがあれば、これもまた衆生を教化することはできない。生死の中において衆生を転ずることはできないし、衆生を教化して涅槃に住せしめることもできない。なに故に無量の衆生のために菩提を行ずるかといえ、菩薩の行は、すでに生死の中の行にあらず、涅槃の中の行にあらず、衆生相の行でもない。一切衆生の所行も、この菩薩の所行の相と同じである。仏の所化の人には貪恚癡なし。一切衆生の所行がこの相の如くであるならば、衆生の貪恚癡はどこから起るかといえ、それは凡夫が勝手に妄相分別を起して貪恚癡を生ずるからである。賢聖法はよく顛倒の実性を知るから妄相分別はない。一切法は、本来、貪恚癡の相を離れているのである、と網明菩薩はいうのである。この法が説かれたとき、四万四千人の菩薩は柔順法忍をえたのである。

時に大迦葉が仏に申すには、もし衆生が網明菩薩を見れば、三惡道に墮せず、また網明所説の法を聞けば、魔も便りを得ず、網明の教化する所では声聞、縁覚の道に墮せず、このような大利益をうる網明の功德莊嚴国について説かれよ、という。仏のいうには、網明の遊行するところはどこでも、無量の衆生が大利益をうるのである。網明の放つ

光明にあえば、諸の衆生は菩提に住するのである。いま網明の説法の功德を説けば、網明菩薩は七百六十万阿僧祇劫を過ぎて成仏するであろう。その名を普光自在王如来といい、国を集好功德という。彼の仏国土には女人なく、この如来は文字をもって法を説かず、ただ光を放って菩薩を照す。光がその身に触れば、ただちに無生法忍うるのである。この光りはまた三十二種の清浄なる法音を出す。それは、空、無相、無作、離欲、離瞋、離癡、無所従、無所去、不住、過三世、無異、不生、無業、不作、無起、無為、真、実、無衆生、無我、鈍、捨、離煩惱、無垢性、一相、離相、住實際、如相、入法性、無縁、菩提、涅槃である。仏寿は無量である、というのである。

大迦葉は仏にむかって、もし清浄の仏土を得んと欲せば、まさに網明菩薩の国土を取るべきであるともうしあげたのである。

そのとき思益梵天が網明菩薩に、汝はすでに仏より授記をえたかと問うた。網明は、一切衆生はみなすでに仏より授記を受けているという。これより梵天と網明とが、授記と六度の関係について論議する。網明のいうには、所行無きところが菩提であって、六波羅蜜を行ずるも、六波羅蜜も実には所行はない。それにもかかわらず菩提の記を受けることを得たのは、それは如法性が授記をえるのであって、自分の授記もそれなのである。他の菩薩の授記もそのようである、と説くのである。

その時、思益梵天は仏に、世尊菩薩のいかなる所行に対して菩提の記を受けるのであるかと問うには、菩薩が生法を行ぜず、滅法、善、不善、世間、出世間、有罪法、無罪法、有漏法、無漏法、有為法、無為法、修道、除断、生死、涅槃、見、聞、覺、知、施、捨、戒、覆、忍、善、発、精進、禅、三昧、慧、行、知、得などを行ぜずして行ずる者には菩提の記を授けるのである。それは諸の行はみな相を取る、無相無分別こそ菩提であるからである。われ仏は、

過去、喜見劫のとき、七十二那由陀の仏を供養した。またこの劫を過ぎて善化劫のとき、二十二億の仏を供養した。またこの劫を過ぎて梵歎劫のとき、一万八千の仏を供養した。このようにして無咎劫に三万二千の仏、莊嚴劫に四百四十万の仏にそれぞれ供養したが、いずれの時、いずれの仏もわれに授記されなかった。それは所行に依止して相を取るからである。それ故、菩薩が一切の諸行を出過すれば、すなわち授記をうるのである。われはその後にあって然燈仏を見て、無生法忍を得た。そのとき仏はわれに授記されて、来世に釈迦牟尼仏となるであろうといわれた。われはただちに一切の諸行を出過して六波羅蜜を具足したのである。このようにわれは然燈仏の所において六波羅蜜を具足したのである。それは、施を念ぜず、戒に依止せず、忍を分別せず、精進を取らず、禪定に住せず、慧において二ならず、これが六波羅蜜の具足である。これを具足しおわれば、薩婆若一切智を満足するのである。一切法の平等なるを薩婆若というのであると説き、以下、薩婆若の種種の相をあげるのである。(このところを薩婆若品と名づける流布本がある) 以上巻第二、

## 一、談論品第七

この会中において、文殊師利はなんら説くところがないことを思益梵天はとりあげて仏にそのことをもうしあげた。仏は文殊師利に法を説くべきことをすすめられた。しかし文殊は、法は説くべからず、演ぶるべからず、論ずべからざるものであるから、示すことはできないと仏にもうしあげた。すると思益梵天が文殊師利に、それでは衆生のために法を説かないのかとせまった。文殊師利のいうには、一切法の法性は不二の相であるから、その法性中に入れば、法の説くべきものはない。説者と聴者と分別すれば説法はあるが、法性において二相はない。我に貪著を起すことによつて二と分別するのである。仏の法は如の所説であるから、六塵を用いざる者によつて聞くことができるので

あるといい、以下、思益梵天が問い、文殊師利が答えるに、二十五番の問答をする。その終りにあたり、文殊師利は、四顛倒のために淨、常、樂、我を得ず、もし一切法の空、無我をみればこれを聖諦となし、この聖諦を得れば苦を見ず、集を断ぜず、滅を証せず、道を修することはない。そうすれば二相を離れ、この道をもって一切法を求め、求めて得ざれば、生死を離れず、涅槃に至らない。これが聖道である、と説くのである。

その時に摩訶羅梵天子（等行菩薩）は文殊師利に、なにをいいて優婆塞というか、菩薩にして菩提心をおこす者はいずれに趣むくか、と問う。文殊師利は、二見をおこさざるものを優婆塞といい、菩薩の趣むくところは虚空である、阿耨多羅三藐三菩提は虚空に同じであるからである、という。続いて等行菩薩は仏になにをいいて菩薩となすかと問う。仏はそれに答えて邪定の衆生のために大悲を起して菩提心をおこさしめる、これを菩薩というのであると説く。すると菩提菩薩は仏にむかって、われらも菩薩たる所以のものを説くであろうといい、つづいて各菩薩が菩薩たるの所以を説くのである。その菩薩の名をあげれば、堅意菩薩、度衆生菩薩、断悪道菩薩、觀世音菩薩、得大勢菩薩、無疲倦菩薩、導師菩薩、須弥山菩薩、那羅延菩薩、心力菩薩、師子遊歩自在菩薩、不可思議菩薩、善寂天子、実語菩薩、喜見菩薩、常慘菩薩、心無礙菩薩、常喜根菩薩、散疑女菩薩、師子童女菩薩、宝女菩薩、毘舍佉達多優婆夷、跋陀婆羅居士、宝月童子、切利天子曼荼羅花香菩薩、作喜菩薩、思益梵天、弥勒菩薩、文殊師利法王子、網明菩薩、普化菩薩など、都合三十二人を数えるのである。そのとき仏は等行菩薩にむかって、菩薩はよく一切衆生に代つて諸の苦惱をうけ、またよく一切の福事を捨てて諸の衆生に与える、これが菩薩であるというのである。

#### 一、論寂品第八

思益梵天は等行菩薩に、菩薩の行について問うた。等行のいうには、それは一切の有為法の衆生の行に随うのであ

る、そしてそれは諸仏の行ずる所であり、諸仏は第一義空をもって行とする。それでは梵夫の行と諸仏の行と差別はあるのかといえ、一切法は空であり、一切法には差別はないというのである。

つぎに、思益梵天は、文殊師利に問う、菩薩が行ずるところの行は何であるかと。文殊師利は、それは四梵行である。そして何行をもって清浄を知見するかといえ、我見を清浄にする行である。我の実性を見る者はよく実の知見をなすものである。我の実性をうるのは、無我の法をうることによる。我は畢竟して根本なく、決定なく、このことをよく知る者は我の実性をうるのである。我を見るものは仏を見るものである。我性はすなわち仏性であるからである。それ故、我見を壊せざるものはよく仏を見るのである。我見はすなわち法見である。一切法は空であるから、所行なきを正行となす。正行は一切有為法を行ぜず、見のために行ぜず、これ断となさず、証となさず、修となさず、正行である。また慧眼はいかなる法を見るかといえ、有為法を見ず、無為法を見ず、無為法は空にしてあるところなく、眼道を出過するからである。正行中には道なく果なく、得る所はない。もし得る所があれば増上慢の人である。もし法は不生であると知ればこれを得るといのである。これを正位に入るといふ。正位にあれば、我と涅槃と不二である。平等であり、了義である、これが正位である、と説くのである。

仏はこの文殊師利の所説をほめた。この法を聞いた会中の七千人の比丘は満足して心解脱を得、三万二千人の諸天は法眼浄をえ、一万人は禅定をえ、二百人は阿耨多羅三藐三菩提心をおこし、五百人の菩薩は無生忍をえた。

そのときに思益梵天は仏に、文殊師利はよく仏事をなしておおくの衆生を利益したともうしあげた。だが文殊師利は、衆生の決定相なきところには衆生はいなく、衆生教化のために仏が入滅せられることもない、仏は生死を得ず、涅槃をえず、諸の仏弟子も解脱もえたるものもまた同じである。涅槃というも、ただ言説あるのみである。この法は



諸法に貪著せざるものが信ずるのである。滅度とは衆縁不和合をいう。それは因縁和合しなければ、諸行を起さず、諸行を起さなければこれを滅といい、相を起さざるを畢竟滅という。これを四聖諦という、と説くのである。

その時に等行菩薩は文殊師利にいう、文殊の所説はみな真実であると。文殊師利のいう、提婆達の語も、如来の語も、異なく別なし。それは一切の言説は如を出でざるものであるから、みな如来の言説である。仏は二事を説かれた。それは、一つは如実説法、今一つは聖黙然である。仏法僧においてこの二事は、もし法を説いて仏に違わず、法に違わず、僧に違わなければこれ説法、もし法を知ればこれ仏、相を離れば、これ法、無名なればこれ僧、これ聖黙然という。これを四念処についていえば、四念処によって説く、これを説法といい、一切法において憶念するところなきを聖黙然という。このように三十七助道法において説法と聖黙然の二事を行すべきであると、説くのである。仏は文殊師利に、ただ諸仏にのみこの二事があるのであるといわれた。

ときに須菩提は仏にいう、われ仏より親しく聞く、集会の人人は二事を行ずべしと。会中の声聞はいかにしてこの二事があるか。仏はいわれた、声聞辟支仏にはこの二事はないと。文殊師利は須菩提にいう、如来は衆生の八万四千の行を了知せられている。二乗にはこの二事は及ばないことを知られている。菩薩にしてよくこのような功德を成就する者も、この二事は及ばない。ただ仏のみ成就するのであると。仏が須菩提に告げられるには、菩薩も、入一切語言三昧を成就すれば、みなこの功德をうるのであると。ときに文殊師利は等行菩薩にいう、衆生の八万四千の行のために、八万四千の法蔵が説かれた、これを説法という。そしてつねに滅受想行の定中にあるを聖黙然という。

仏は等行菩薩にいわれた、無量無辺のむかし、名聞劫のとき意見国に普光という仏がいた。この国に四百億の四天下があり、一一の天下に諸城あり、一一の城に一万五千の村落があり、一一の村落には無量百千人の人がいた。時の

人民は念仏三昧をえていた。この国の普光仏は三乗の法を説いた。それはまさに二事を行ずべし、もしは説法、もしは聖默然であると。そのとき、上方の医王仏の国土に二菩薩がいた。一人を無尽意、もう一人を益意といった。この二人の菩薩が普光仏のところに来詣した。普光仏は二人のために淨明三昧を説いた。それは一切諸法の性は常に清淨なりというのである。一切の法は空相、無相、無作の相であるからである。この常淨相をもって、生死はこれ涅槃と知るのである。涅槃の性はこれ一切の法性である。心性も同じである。凡夫心も同じである。心相は実には不垢汚性であり、常に明淨である。この故に心は解脱を得るのである。これを淨明三昧門に入るといっているのであると説くのであった。かの二人はこの三昧を聞いて、諸法の中に不可思議の光明をえた。ときに無尽意菩薩は普光仏にいうには、われ等二人はすでに淨明三昧門を聞いてそれより入ったのであるが、なに行をもつてこの法門を行ずればよいのかと。仏は答えられた、二行を行ずべきである、一は説法、一は聖默然であると。そこで二菩薩は外に出て一園林に行き、神通力をもつて宝樓を化作してその中において修行した。すると妙光という梵天が七万二千の梵衆をつれて来詣し、二菩薩に問うた。普光如来は、汝等はまさに二事を行ずべしと説かれたが、二事につきわれらに説き示されよと。二菩薩は、この二事は如来のみよく通達するところであるが、われらまさに少しく説くであろう、といい、二句の義をもつて梵衆のために説いた。時に七万二千の梵衆はみな無生法忍を得、妙光梵天は普光三昧を得、この二菩薩は、七万六千年にわたつて無礙弁才力をもつてあらゆる所問の答え、互いに相い問答してつきることはなかった。普光仏は虚空の中にあつていうには、文字をもつて言説して、諍うことなかれ。言説は空にして響のごとく、問答もまたこのようなものである。汝等二人は、無礙弁才と無尽陀羅尼を得た。仏法は寂滅相であり、この中に文字はない。それ故文字に随つてはならぬと。二菩薩は仏の教を聞いて默然として問答をやめた。仏は等行菩薩に告げられた、二人は弁

才説法をもって百千万劫を過ぎても尽きることはない。この二人のうち無尽意菩薩こそ今の文殊師利であり、益意菩薩は今の汝、等行菩薩であり、妙光梵天は今の思益梵天であると。

#### 一、 佯行品第九

その時、等行菩薩が仏にもうしあげるに、衆生にしてよく勤精進するものは菩提をうる、懈怠のものは、百千万仏にあらうことがあっても、菩提を成ずることはできないという。ときに文殊師利は等行菩薩に勤精進はいかに行すべきかを問う。それは諸法において分別するところなく、諸法の平等を見て聖道をうることでありと等行は答える。すると思益梵天がさらに文殊師利にむかって、もし行者が平等の中において諸法を見ざるべき、聖道を得おわるのであると説示するのである。文殊師利は諸法を見ざることに付いて、思益に問うた。思益は、それは二相を離れることである、二相を離れて見ざるはこれ正見であると答える。以下正見について十四番の問答をあげ、思益梵天はそれに答えて、一切法は平等にして差別あることなく、これ諸法実相の義であり、諸仏世尊は諸法の性相の如に通達するが故に、如来正遍知者と説くのであるというのである。

#### 一、 志大乘品第十

ここにおいて等行菩薩は、大乘の中に住するとはいかなることかを仏に問うた。仏は偈をもって答えられた。それは菩提心をおこし、色は即ち菩提と知ること、等しく如相に入り、正しく第一義を行じ、分別して二となさず、また不二をも得ず、世間法において処中にあり、法性の真実の相を知り、仏道において諸法を捨離せず、方便力をもって衆生の願う所を充滿し、仏の正法を護持し、諸仏の慧を求めんとして願求に著せず、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を修し、因縁の法を信解して邪見なく、また我見、仏見、空見、生死見、涅槃見なく、諸乗中、大乘を第一とな

し、この經を聞き、ないし一偈をも持つならば永く諸難を脱し、後の惡世においてこの經を聞けば、授記をえて仏道を成ずるであろう。われは燃燈仏のもとにおいて授記をえた。もしこの經をねがう者あればわれは授記するであろう。仏の滅後においてこの經を解説するならば、仏、世におわさずともよく仏事をなすものであると、説かれたのであった。

仏がこの偈を説くとき、五千の天子は阿耨多羅三藐三菩提心をおこし、二千の菩薩は無生法忍を得、一万の比丘は漏尽し心解脱を得、三万二千人は法眼淨をえた。

一、行道品第十一、

文殊師利は仏にもうしあげた。わたくしの理解するところでは、菩提の願をおこしたならば、これは邪願である。それは得るところあるならば、それは邪であるからである。それ故、菩提を得んとする行はみな邪である。菩提は欲界あらず色界にあらず無色界にあらず住処なく、虚空のごときであり、虚空願をおこすのである。二相をおこして菩提心をおこし、生死と菩提と異なり、邪見と菩提と異なり、涅槃と菩提と異なるといえ、これは菩提の道を行ぜざるものであるという。

そのとき思益梵天は文殊師利に、菩薩はいかなる行を菩提の行と問うた。文殊師利は、一切の行を出過するを菩提の行という。それは、六根所縁の相を離れ、一切法の平等を知り、三世の清淨心をもって菩提の願をおこす。発願は発願するところなく、そこに一切の願をおこし、これをもって道を行ずれば一切智をうる。一切智とは衆生と菩提と異なることなしと知ることである。一切法は如において住するのであり、これまた住するところなきものである訳であるという。以上卷三

一、称歎品第十三

そのとき、会中の釈、梵、四天王は仏にむかって、今、文殊師利の説くところを信解すれば、一切の妄想邪見を破斥する。われらはこの経を聞いて智慧の光明をえた。もし人がこの経を書写し読誦し解説するときは、無量の諸天は法を聞かんがためにその所に来至するであらうと称歎した。

一、詠歎品第十三

世尊は釈、梵、四天王と大衆を讃歎して、この経を聞く者の功德の勝れたること無量の珍宝よりまさっている。この経を聞く者は、諸種の功德をうることに窮め尽すことはできないと説かれるのである。

一、等行品第十四

そのとき会中の不退転天子が仏に、法に随って行ずる者とは何をいうのかと問うた。仏は天子に、もし一切法を受けなければ、法に随って行ずる者という。一切法において憶念なく、分別なく、所行なきところ、これを法に随って行ずるといふのであると説かれた。天子は仏に、この正行者は、諸法は平等に差別なき正道に住するものであるともうしあげた。

ときに思益梵天は天子に、法に随って行ずるかと問う。天子は、今は二相なきため、不二の法をもって随法行を行ずる。分別を離れ、如を行ずるのである。法位の相は六根の所縁ではない。ただ如の相であり法位如もそうである。これが正見である、というのである。

一、授不退転天子記品第十五

釈提桓因は仏に、この説かれた法は、これ法宝、実際であり、顛倒なく、過去は空、未来は不可得、現在は見を起

さず、増上慢を破し、善法を生じ、煩惱を断じ、諸法を断滅せず、そして仏法を護るのである。この法は一切の外道を降伏し、外道の論議師はこの無上の師子吼に堪えることができないのである、といいこの法を称歎するのである。

そのとき不退転天子は釈提桓因に師子吼とは何かと問う。釈提桓因のいうには、行者が法を説いて貪著せず、また不生不滅不出の法を説き、一切法無我、無衆生、空と説き、作仏のための願をおこし、少欲知足、布施、持戒、怨親平等、精進、智慧を説く、これを師子吼というと言るのである。この師子吼の法が説かれるとき、地は六種に震動し、伎楽は鳴り、大光明は遍ねく天地をてらし、百千の諸天が歡喜していうには、この師子吼の法が説かれたとき、閻浮提に再び法輪が転ぜられたと。時に仏は微笑せられた。このとき諸仏の常法として、口より五色の光りがでて普ねく世界を照し、その光りは上は梵世をすぎ、またかえって頂相より入っておさまった。思益梵天は仏にむかって合掌し、偈をもってこの光明を讚歎した。

仏は思益梵天にいわれた、この不退転天子は、今より後、成仏して須弥燈王如来と名づけると。梵天は天子にいった。今、如来は汝に授記された。天子のいう、如と如の法性の授記をえた。行ずる者は、我、衆生、寿命、に住せずして梵行に住するのである。梵行とは不二の道に住するをいい、それは一切諸法に住せざることをいう。また道を修すとは見聞覚知せず、得、証をもってせず、また牢強の精進とは、諸法において一相、異相を見ず、法性を出過するをいう。このとき世尊は不退転天子をほめて思益梵天にいわれるには、われ宿世の所行を思うに、牢強の精進、持戒、頭陀、供養恭敬、誦誦、多聞、衆生愍念、難行苦行をしたが過去の諸仏は授記せられなかった。後に、今、天子の所説のごとき牢強の精進により、然燈仏より授記をえて、釈迦牟尼となったのである。それであるから、精進の相を起さずして精進すべきである。布施に果報を求めず、持戒に貪著せず、忍辱に内外空を知り、精進に相を起さ

ず、禪定に依止せず、行慧に相をとらず、このように法忍を成就すれば世間の平等相をえて、二心、二法、二見なく、すなわち無我空法忍をえて、大悲心を起して衆生を教化する。これが第一牢強精進であると。ときに八千の菩薩は無生法忍をえた。仏はこれに授記し、みな阿耨多羅三藐三菩提をえて各の異国において仏道を成じ、みな同じ堅精進の名号をえたのである。

その時、大迦葉は仏に、大法雨をもつて、菩薩の心をふらされたと、もうしあげた。すると仏は、菩薩が他の衆生に法雨をふらさなかったのはその器が堪えなかったため、今は甚深の智慧の無量も菩薩の心中にふらされたのである。しかも法は不増不減にして同一空味である。しかし衆生の根の利鈍によって、小乗、中乗、大乘を説いて、漸漸に薩婆若一切智にむかうのである。正法の滅するときがきても、菩薩は身命を堵して正法を捨ててはならぬ、正法滅するときは七邪法が出るのであると説かれた。大迦葉は仏にもうしあげた、この菩薩の徳ははかることはできないと。仏は迦葉に、菩薩の功德の無量なることを偈をもって称歎せられた。

#### 一、建立法品第十六

その時、思益梵天は文殊師利に、如来にこの経が後の末世五百歳の時、広く流布することを願うべきであるといった。文殊師利のいうには、一切法は無説、無示、護念あることがないから、この法を護らんとする者は、虚空を護念せんとする者であると。会中の三万三千の天子、五百の比丘、三百の比丘尼、八百の優婆塞、八百の優婆夷は文殊師利の説くところを聞いてみな無生法忍をえた。そして文殊師利にいった、聴法せざる者を聴法という。

そのとき思益梵天は無生法忍をえた諸の菩薩に、汝らはこの経を聴かずやと問う。菩薩は、われらは聴かざるをもって聴くのである。一切法は得べからざるをもって無生法忍をうるのであるという。会中に淨相天子と名づけるもの

がいた。淨相は思益梵天にむかって、この經を聞くだけということでは仏が授記しなかったならば、わたしは授記を与えるであろう。何故なればこの經はよく善法を生じて聖道を開くからであるといい、三十箇条にわたってこの經の功德を説くのである。淨相天子がこの法を説くとき、大地は震動し、仏はほめて、天子の説くところのごとしといわれた。

そのとき思益梵天が仏にもうすには、この天子はかつて過去の諸仏より聞いたところの經であるかと問うた。仏がいわれるには、淨相天子は、過去において六十四億の諸仏のもとにこの經を聞き、四万二千劫をすぎて作仏して宝莊嚴如来と名づけ、国を多宝国という。その中間において、諸仏の出るところでは供養しましたこの經を聞く。この会中にあつて無生法忍をうる者は、みな多宝国に生れるであろう、と。ときに淨相天子は仏にむかって、わたしは菩提を求めないのにどうして授記されるのかと問う。仏は、草、木、枝、葉を火中に投じて、燃えるなかれというようなものである。願わなくてもそれが燃えるように、菩提を求めなくても諸仏のもとにおいて菩提の授記をうるのであるといわれた。そのとき会中の五百の菩薩は仏に、われらは今、菩提を求めず、ともうしあげた。この語がおわるや、五百の菩薩は仏の神力をもって上方の八万四千の諸仏を見た。諸仏は菩薩たちに授記を与えられたのである。

#### 一、諸天歎品四十七

その時に文殊師利は仏にもうして、願わくはこの法を未来世の後の五百歳において広宣布しこの閻浮提に久住せしめられよとお願いした。仏は文殊師利に、この經を久住せしめんがために汝に、天竜夜叉乾闥婆鳩槃荼等をよんで守護せしむべき呪を説くであろう。もし法師がこの呪を誦持すればよく守護せられるであろう、といって呪術の章句を示され、この呪は、現世において十種の力をうる、十力とは念力、慧力、行力、堅固力、慚愧力、多聞力、陀羅尼



力、楽説弁力、深法力、無生忍力であると説かれた。

この呪術力を聞いた四天王は仏にむかつて、われら法師を衛護し、また経を持ち流通し解説する者を守護するであろう。また經典所住のところ五十里四方には悪鬼便りを得せしめないであろうともうしあげた。

そのとき毘楼勒迦天王、毘楼婆叉天王、犍駄羅吒天王、毘睺婆那天王、善宝はそれぞれ偈を説いて法師の衛護と経の利益をうたった。

ときに釈提桓因は仏に、法師の衛護をもうしあげた。釈提桓因の子・劬婆伽は真珠の宝蓋を如来に献じ、偈を説いて、われは一切智を求め、経を守り、仏はわれに援記を与えられ、成仏して為智王如来となる、とうたいあげた。

ときに娑婆世界の主、梵天王は仏に、われも法師のもとに行き供養するであろうともうしあげた。ときに妙梵天王は偈をもって経を演説し経の聞くべきことをうたった。

#### 一、囑累品第十八

そのとき世尊は神通力をもって、魔波旬との軍衆を召して、誓願を立たしめた。それはこの経の流布するところには魔事をおこさず、この経を守護するということである。そのとき世尊は金色の光りを放って世界を照し、文殊師利にいわれた。如来は今、この経を守り法師を護り、閻浮提にあって仏法を滅せしめずと。ときに会中の衆生は華香をもって仏を供養し、世尊よこの経を広宣流布せしめたまえともうしあげた。仏は阿難に汝はこの経を受持するかと問ひ、阿難よ、われは汝にこの経を囑累するであろう、よく受持し人のために広説せよといわれ、さらにその功德は現世に十一功德の蔵ありといわれた。それは、見仏蔵、聴法蔵、見僧蔵、無尽財蔵、色身蔵、眷属蔵、所未聞法蔵、憶念蔵、無所畏蔵、福德蔵、智慧蔵であるといっているのである。

仏がこの経を説くとき、七十二那由他の衆生は無生法忍を得、無量の衆生は菩提心をおこして漏尽き心解脱をえた。阿難は仏にむかってこの経を何と名づけ、いかに奉持すべきかを問うた。仏はこの経を「撰一切法」、「莊嚴諸佛法」、「思益梵天所問」「文殊師利論議」と名づけるといい、この経を説きおわった。文殊師利、思益梵天、等行菩薩、大迦葉、阿難および諸の天衆、一切世人はみな仏の言葉を受持して大いに歓喜した。

思益梵天所問經第四卷 (以上)

結び

右が経の大筋である。不二の法を説き、言語道を断ずる境地を説く点において維摩経と同趣旨である。経の付属を阿難に托したところは、いまだ比丘教団を引きずっている。小乗の諸法分別を破斥し、諸法の実性は如であると教説し、大乘はこの如に通達するところを説いたものであることを強調する。

この経の叙述において、われわれは小乗のいかなる点において真の仏法と乖離するかが読みとれる。この経は大乘を称讃しながら、衆生の利鈍を観察して小乗、中乗、大乘と説く点において教化の方便を忘れていない。小乗を破斥して大乘の教説へ導く過程を知ることのできる資料であるといえる。(了)

(立正大学日蓮教学研究所有員・東洋大学東洋学研究所長・同文学部教授)